

東京音楽大学附属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	東京音楽大学附属民族音楽研究所主催2022年度公開講座No.2 「ルネサンス時代のリュートとビウエラ ～歌との関係は？～」
Title in another language	FY2022 IETCM Public Lecture Series #2-Lute and Vihuela of the Renaissance era: What is the relationship between these and songs?
Author(s)	水戸茂雄 (MITO Shigeo), 坂崎則子 (SAKAZAKI Noriko), 服部洋一 (HATTORI Yoichi)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 13, p. 61-71
Date of issue	2024-03-27
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	https://tcm-minken.jp/publication/IE_B13202306.pdf

東京音楽大学附属民族音楽研究所主催 2022年度公開講座 No.2
「ルネサンス時代のリュートとビウエラ ～歌との関係は?～」

FY2022 IETCM Public Lecture Series #2–Lute and Vihuela of the
Renaissance era: What is the relationship between these and songs?

水戸茂雄 MITO Shigeo*

坂崎則子 SAKAZAKI Noriko**

服部洋一 HATTORI Yoichi***

「16世紀のヨーロッパのリュートとビウエラ音楽を歌からのぞいてみよう」という副題を付けてルネサンス時代のリュートとビウエラという撥弦楽器が歌からどのような影響を受け、歌とどのような関係を築いて行ったのかをソプラノ、アルト、テノール、バリトンの4声とリュートとビウエラで解説と実演を行った。

キーワード：ルネサンス・リュート Renaissance lute、ビウエラ Vihuela
ルネサンス音楽 Renaissance Music、リュートソング Lute song
エール・ド・クール Air de cour、ビウエラ歌曲 Canción de Vihuela

1. はじめに

リュートは8世紀頃に中近東からヨーロッパに伝わったウード al'ūd という撥弦楽器で、洋梨を縦半分に割ったような形をした胴体を持ち、胴の片方にネックと糸倉が付いている。弦は2本を一对（各対をコースと呼ぶ）として張られ、ルネサンス時代のリュートでは6コースリュートから12コースリュートまで存在する。ビウエラ (Vihuela) はギター型やヴィオラ型のタイプがあり5コースビウエラから7コースビウエラまでの種類があり、主にイベリア半島のスペイン領で使用された。

今回の公開講座ではスペイン、イタリア、フランス、イギリスの例を提示した。当日のプログラムは以下の通りで行われた。

東京音楽大学附属民族音楽研究所主催 2022年度第2回公開講座

2023年2月25日（土）14:30開場 15:00開演 TCMホール

ルネサンス時代のリュートとビウエラ～歌との関係は?～

16世紀のヨーロッパのリュートとビウエラ音楽を歌からのぞいてみよう

歌からリュートやビウエラがどのように影響を受けて音楽が形成されたのかを検証する。ヨーロッパの国々の元歌を歌ってもらい、リュート歌曲やビウエラ歌曲、さらにリュート・ソロやビウエラ・ソロ曲を演奏して比較する。

司会進行 坂崎則子教授

解説とリュート、ビウエラ演奏 水戸茂雄講師

歌唱指導 服部洋一教授

歌 東京音楽大学学生：ソプラノ 若林ゆみ、アルト 神原 愛、
テノール 原佑斗、バリトン 長谷川陽向

ビウエラ (Vihuela)

- ① Benedictus: Missa Ave Maris stella (ミサ、輝ける海の星よ)
Enriquez de Valderrábano (16c、スペイン)
ミサを無伴奏で歌う — 歌とビウエラがユニゾンで演奏 — 上声につけられた
声部と2声で — ビウエラ・ソロ

ルネサンス・リュート (Renaissance lute)

- ② Qual miracolo Amore (なんとという奇蹟をアモーレは)
Vincenzo Galilei (1520-1591、イタリア)
最初にリュート・ソロ — 3声のカンツォーネ
- ③ Tant que vivrai (花咲く日々に生きる限り)
Sermisy-Pierre Attaignant (1494?-1551/2、フランス)
4声 — 歌 (ソロ) とリュート — リュート・ソロ
- ④ Air de cour (エール・ド・クール=王宮の歌曲集)
Las qui hastera (ああ、時を急がせるもの)
Pierre Gedron (1570-1620、フランス)

ビウエラ

- ⑤ La mañana de Sant Juan (聖ヨハネの朝)
Diego Pisador (1509/10-1557、スペイン)
ビウエラ・ソロ — 3声とビウエラ タブラチュア譜の赤い字が歌のパート
- ⑥ Fantasia XI (ファンタシーア 11番) Luys Milán (1500?-1561、スペイン)
- ⑦ Sospirastes, Baldovinos (ため息をつくバルドビノス)
ミランのファンタシーアの特徴を説明しビウエラ歌曲の共通点を説明
ビウエラソロ、歌とビウエラ
- ⑧ O gloriosa Domina (おお、栄光の聖母よ) Luys de Narváez (16c、スペイン)
この聖歌の由来を説明、ビウエラでディフェレンシアスされた元歌を歌ソロ、
ディフェレンシアスの部分をビウエラで演奏

⑨ Mille Regretz (千々の悲しみ) Josquin des Prez (1440-1521、フランス)

⑩ Canción de Emperador (皇帝の歌) Luys de Narváez (16c、スペイン)

この曲の由来を説明

4声で千々の悲しみ、ビウエラソロで皇帝の歌を演奏

ルネサンス・リュート

⑪ Now o Now (今こそ) John Dowland (1563-1626、イギリス)

楽譜の説明

4声の歌—歌ソロとリュートで演奏—4声とリュート

2. ビウエラ

① **Benedictus: Missa Ave Maris stella** (ミサ、輝ける海の星よ)、Enriquez de Valderrábano (16c スペイン) 作

2声で構成されたビウエラ独奏用に書かれたこのミサ曲を用いて、主旋律と対旋律がどのように進行しているのかをテノールとビウエラでそれぞれのパートを演奏、次に2声の独奏曲としてビウエラで比較演奏を行った

3. ルネサンス・リュート

② **Qual miracolo Amore** (なんとという奇蹟をアモーレは)、Fronimo Vincenzo Galilei (1520-1591 イタリア) 作

ヴィンツェンツォ・ガリレイが著した音楽理論書「フロニモ」で声楽曲をリュートにどのように編曲するのかを述べている。ここでは作者が自身の作曲した3声のカンツォーネを用いてリュート独奏用に編曲しているものを紹介し、リュート独奏と3声の合唱で比較演奏を行った。

③ **Tant que vivrai** (花咲く日々生きる限り)、Sermisy-Pierre Attaignant(1494?-1551/2 フランス) 作

当時、ヨーロッパで流行したシャンソンの中からセルミジ作曲の恋の歌を用いて4声の合唱とソプラノとリュート伴奏とリュート独奏で比較演奏を行った。

4. エール・ド・クール (王宮の歌曲集 Air de cour)

④ **Las qui hastera** (ああ、時を急がせるもの)、Pierre Gedron (1570-1620 フランス) 作
フランスのリュート歌曲集エール・ド・クールから Gedron 作曲《Las qui

この聖歌は日本の隠れキリシタンの人々の間で歌い継がれて来た「おらしよ＝Oración」の中にも残されている。ナルバエスはこの曲をテーマとして「おお、栄光の聖母よ」による6つのディフェレンシアス作曲している。今回は、はじめと終わりに元歌の聖歌をバリトンで歌唱し、ビウエラでディフェレンシアスの3部を演奏し、比較実演を行った。

⑨ **Mille Regretz** (千々の悲しみ)、Josquin des Prez (1440-1521 フランス) 作

当時、ヨーロッパで流行したジョスカン・デ・プレ作曲と言われる失恋を歌ったシャンソン「千々の悲しみ」を4声の合唱で演奏を行った。

⑩ **Canción de Emperador** (皇帝の歌)、Luys de Narváez (16c スペイン) 作

時の神聖ローマ皇帝兼スペイン皇帝であったカール5世が特に「千々の悲しみ」を好んでいたため、スペイン宮廷音楽のビウエラ音楽家のルイス・デ・ナルバエスがこの「千々の悲しみ」の旋律を使用してビウエラ音楽「皇帝の歌」を作曲し、カール5世に献呈した。

今回はビウエラ・デ・マーノで実演を行った。

6. ルネサンス・リュート

⑪ **Now o Now** (今こそ)、John Dowland (1563-1626 イギリス) 作

エリザベス朝時代に活躍したイギリスのリュート音楽家ジョン・ダウランドはリュートソングに優れた曲を数多く残している。ダウランドのリュートソングにはテーブルブックと呼ばれる楽譜がある。四辺の左半分にはリュート譜付きのソプラノパート譜が書かれており、右半分に上下、右側にテーブルを囲むようにアルト、テノール、バスパート譜が書かれている(譜例2参照)。また、ダウランドはリュートソングをリュート独奏用にも編曲している。今回はソプラノとリュート伴奏、リュート独奏、4声の合唱とリュート伴奏で実演を行った。

7. おわりに

この公開講座で合唱参加してくれた東京音楽大学の声楽の学生たちはほぼ全てが、初めて体験する曲だったと思う。本番では合唱指導の服部洋一教授の優れた指導の下、彼らはこの時代の曲をよく理解し、素晴らしい演奏を披露してくれた。また、坂崎則子教授の巧みな司会進行で大きなアクシデントも無く予定通りに講座を修了することが出来た。

今回の公開講座の参加者が定員300名と言う事もあり、裏方のスタッフたちの活躍も大変なものであった。彼らの協力のもと、参加者の方々が熱心に聴講し、好評を頂けたのは公開講座企画者として喜ばしいことであった。

Now o Now *1/4 - 1/4 1/4 7/8 J. Dowland*

Now o Now *1/4 - 1/4 1/4 7/8 J. Dowland* 1.

VI. CANTUS.

D

<p>Deare when I from thee am gone, Come see all my joyes at once, I loosed thee and thee alone In whole loue I loyed once: And although your fight I heare, Till that death do fence because,</p>	<p>Deare if I doe not renne, Loue and I shall die togither, For my absence neuer mourne Whom you might haue joyed once: Part we must though now I dye, Him d'espaiye doth caule to lie,</p>
---	---

譜例2. Now o Now (今こそ別れねばならぬ John Dowland 作)

最後に、出演者の皆さんの公開講座の感想文を掲載して「おわりに」の章としたい。

若林ゆみ (ソプラノ)

この度共演者の皆様とともにこの貴重な演奏機会に参加させていただけたこと、大変嬉しく思います。中世、ルネサンスの楽曲にここまで踏み込んで学んだ経験は少なかったため、新鮮な気持ちで挑戦しました。ふだん私たちが学ぶような作品より前の時代の音楽について学ぶことで、後世の音楽への理解がより深まることを身をもって体感しました。「古楽」というと楽譜の読み方が変わったり、楽譜そのものの書かれ方すら異なることもあって触れがたさを感じる人もいるけれど、どの時代の作品に取り組む音楽家であってもこういった年代の音楽を学ぶことは素晴らしく、これを学ばずして音楽大学を卒業するのは勿体ないと感じました。

私自身、リユートを学びはじめているのですが、楽譜やからだの扱い方を理解するには長い時間を要しました(その学びは今でも続いています)。自分が今まで培ってきた感覚に任せて弾いてしまうとどうも齟齬が生じるようで、演奏を成立させるために先生の指導やお手本をよく見ながらその障害をひとつずつ克服していく作業が必要でした。授業で断片的にしか学んでこなかったけれど、こういった音楽が次の時代のものに繋がっているんだと、いざ触れて感じることで不思議な気持ちになりました。

音楽・音楽史はどの部分を切り取ってもひとつひとつのテーマが壮大で、それらを理解

するには大きな時間を要します。自分がどの「音楽」部分を追いかけるか選ばなければなかなか深くはすすめないものですが、中世やルネサンスの音楽というものにふれる喜びや安らぎが、専門家や愛好家だけでなくさまざまな人のところに届くことを願います。

神原 愛（アルト）

古楽概論の講義にてリュートとビウエラに出会い、その空間に溶けていくような音色に魅了された。2023年2月の公開講座では、ルネサンス期の歌とリュートとビウエラの密接な関係を色々な形態で演奏した。その中でも特に印象に残ったのは《Air de cour》である。歌とリュートが、言葉の持つ母音の長さやアクセントの位置にあわせて自由にアンサンブルをし、歌うというよりリュートの合いの手にあわせて語るような感覚を覚えた。また、ラテン語、フランス語、スペイン語、イギリス語などの多様な言語の歌に取り組み、リュートやビウエラが伝播した地域の広さや生活様式と音楽との関わりについても学んだ。

加えて、これまでピアノ、チェンバロ、ハープ、ヴィオラ・ダ・ガンバなどの伴奏楽器と共に歌ってきたが、リュートやビウエラの音の小ささや繊細さ、また持続時間の短さが先に述べた楽器たちと比べて非常に特徴的であると感じた。この特徴は当初は短所のように感じていたが、アンサンブルを重ねるにつれ、人間の呼吸により近く寄り添える楽器だと思えるようになった。これらがルネサンス期以降の生活音楽に欠かせないものであったということを実感した。大学の4年間のレッスンや授業だけではなかなか得がたい貴重な機会となった。

原 佑斗（テノール）

今回この公開講座に参加することができ、光栄に思っております。

自分が普段歌っております楽曲は、ロマン派のイタリアやフランスで歌われたものが多いです。そのため、今回関わらせて頂きました楽曲に触れること自体初めてであり、リュートの音やリュートと共に演奏すること自体も初めてでした。しかし、何も知らない楽曲を耳にしたにも関わらず、心地よさと美しさに心惹かれました。これは、リュートというものが音楽の原点に近く、様々な人の奥底にあるようなものを引き出す力があるものだからだと考えます。歌手として感じたこととしては、三重唱などになった際、バランスや音程感など難しいところは多々ありました。しかし、その大変さに勝る和音の調和や、進行の美しさに心打たれました。次回リュートとの演奏する機会があった際は、更に知識的な部分も増やし、今回難解であった部分や雰囲気などを理解した上で美しく奏でられればと思います。講座の進行をして頂きました坂崎先生と水戸先生の解説もとてもわかりやすく、より知見を深められる点もこの講座の素晴らしいところだと感じております。次回も楽しみにしております。

長谷川陽向（バリトン）

2023年2月に行われた公開講座『ルネサンス時代のリュートとビウエラ―歌との関係は？―』では、僕にとって初めての体験が多かったです。

自分が常日頃より取り組む声楽曲は、ピアノと歌のために作られた曲が多く、ビウエラやリュートと一緒にアンサンブルをすることは正直初めてでした。そしていざ一緒に演奏をしてみると、ビウエラやリュートの旋律と、詩文のもつ言葉のリズム感やイントネーションが完全に重なりあっていくのを実感しました。

詩にどのようにして音楽がつけられ、そして基礎となる定旋律に対してどのような旋律が加えられ、重なっていくのか、というのを水戸茂雄先生のお言葉を通して感じる事ができ、演奏会とは違う形でルネサンス音楽の歌を堪能させて頂きました。

タブラチュアがTAB譜として現代に甦った、というお話も講座の中でありましたが、時代を超えてルネサンスから今現在まで受け継がれているものが、まだまだ沢山あると思います。僕自身もビウエラと共に歌唱をしながら、詩からもたらされる感覚や感情、そして言葉のもつ語感に対して、作曲家がいかにセンシティブに反応して曲が作られたのかということに心を向けました。作曲家の心を通して詩の世界に行きつく、という境地は、少なくともルネサンスから今現在に至るまで変わらない歌の魅力のひとつなのだと僕は思いました。何世紀もの時を越えて古い時代から今日まで受け継がれたものは何があるのか、そしてなぜ受け継がれたのかということに関して、これからも強い興味を持っていきたいです。そして、温故知新と言うとおり、過去の音楽の中からたくさんの発見をすることで、普段触れている音楽との接し方をより良い方向へ高めていけたらと考えております。

所感：ルネサンス時代の響きに触れて

16世紀ルネサンスは合唱ポリフォニーを中心として、豊かな声の饗宴が繰り広げられていた時代であった。今回はスペイン、イタリア、フランス、イギリスの歌が取り上げられ、宗教的なものや、人々に愛されたシャンソン、宮廷で歌われたエール・ド・クールなど、幅広く選択され、奥行きも広がりも充実したプログラムが組まれた。

リュートはヨーロッパ各国で活躍、スペインに限っては、ビウエラが主流だったが、こうした楽器が歌曲の伴奏、歌曲に由来する変奏曲や舞曲を奏でていた。フランスのシャンソンなど、合唱の形で記譜されていても独唱で歌われたり、スペインの歌曲のように歌の旋律が全体の中に織り込まれていたりするユニークなものもあり、このようなことが積み重なり、受け継がれて、その様子をまといながら、次第に器楽曲としての姿を整えていったのが、この時代の器楽曲の姿であった。演奏された数々の楽曲を聴いていくうちに、歌と楽器が多様な形で寄り添い、影響し合っただけで新たな表現を獲得していく過程がつぶさに感じられた。

今回は当時のリュート、ビウエラの音楽を歌から展望してみようという企画であった。実際にルネサンス・リュートやビウエラ・デ・マーノの演奏、そしてこれらの楽器で伴奏された歌を実際に聴いていくうちに、作曲当時の響きが目の前に繰り広げられて、音楽

は時を超えて甦り生き続ける芸術だという感慨に満たされた。この頃の歌は激しい感情表現というより、喜びも哀しみもあくまで節度を崩さずに歌われている。歌ってくれた学生達は、主に18世紀以降のオペラやロマン派の歌曲などをレッスンで学んでいる。リュートやビウエラの音色は繊細で、今からすると控えめに感じられるので、最初はこのような音色にどのように声を合わせていくか、戸惑いも感じられた。短い練習期間であったが、服部先生の優れたご指導で、次第に表現法を会得するにつれて見事に歌ってくれるようになっていった。学生それぞれが今まで学んできた音楽の源流に触れ、そこで初めて自分たちが普段演奏している音楽に音楽の歴史の息吹が吹き込まれたことを実感させてくれた。こうした経験が実感を伴って、学生達の感覚にしっかりと根付いて、これからの演奏につながっていくことを願っている。

(坂崎則子 記)

ルネサンス時代の歌と撥弦楽器との関わりが生み出した豊かな世界に触れて

2022年度末に行なわれた民族音楽研究所主催の「ルネサンス時代のリュートとビウエラ～歌との関係は？」に、歌唱指導として関わらせていただいた。このことで筆者は、古音楽を研究・演奏する上で、更にたくさんの刺激を受けることが出来たと感じている。またこの催しのために、東京音大の学部生及び院生で新たなヴォーカル・コンソート（グループ・レナセンティストと筆者が勝手に命名）を組み、日頃はバロック・古典派以降からロマン派・近代の作品が主なレパートリーであろう彼らと、ルネサンス期の声楽曲も通しての新鮮なやりとりが出来たことは、自身と学生諸君のためにもなったばかりでなく、東京音大においても、このような古楽の声楽アンサンブルに取り組んでいける時代が来たのだ、という新たな可能性を感じさせてくれるものであり、この催しはとても意義深いことであつたと受けとめている。

日頃から、近現代のものを主なレパートリーとして歌っていると、歌手は、ともすると非常にデリケートな表現であるとか、言葉の抑揚に沿った微妙なイントネーションと意味合いに基づく繊細な声の使い分け、或いは、ナイーヴな音を奏でる楽器と調和する声のアンサンブル・テクニックとセンスというものがいつの間にか失われてしまいがちである。そして、いきおい必要以上に大きな声で、押しつけがましい歌唱になってしまうことになりやすく、このことが原因で若いうちに声を失ってしまうという悲劇に見舞われる危険性もあるのだ。その点、古楽器を伴奏とした、こうした古の音楽の世界の中に身をおき、これとバランスする様に声を操るとなると、ましてや、伴奏楽器がチェンバロや古楽コンサートでなく、リュートやビウエラ1本だけという、即ち、直接指先で弦に触れつつ奏でる、実に繊細な音を紡ぎ出す撥弦楽器とのアンサンブルとなると、歌手の方も違った声の世界が見えてくるものなのである。実はその時に、バロック期以降にめざましい発展を遂げたベル・カント唱法の、その河の流れの源はどこにあつたのかを垣間見るような瞬間に出会うものなのだ。

歌と撥弦楽器とのアンサンブルは、筆者もこれまで多く経験してきた。ピアノを、そし

てオーケストラを伴奏に歌うということも多くしてきたが、幼少期からギターにも親しんでいたせいも、自らギター弾き歌いもする一方、ギター、リュート、テオルゴ、ウード、ビウエラ、アイリッシュ・ハープ等の伴奏で歌うことにも、何の抵抗も感じることなく演奏をしてきた。上記の撥弦楽器は、時としてピックやプレクトラムで弾かれる場合もあるが、そのほとんどは指弾きであり、その音は常に丸く、どんなに *f*(フォルテ)でも、決してうるさくはない、それらの音とよくなじむ声こそが、その後に西洋の音楽世界の基盤となっていくベル・カント唱法の持つ「丸く格調の高い声」を生み育てる揺籃であったのだとさえ思えてくる。

コンサートでは、元々多声音楽曲として書かれ、本国だけでなく周辺諸国でも人気を博し或いは、当時の人々に親しまれた曲のメロディーを歌唱声部に持つビウエラ歌曲、リュートソングとして書かれた後に4声体の重唱曲に改編された曲などの作品がグルーポ・レナセンティスタの諸君により歌われたのだが、とても数ヶ月の練習とは思えないほどのバランス感覚で、スタイリッシュに演奏してくれていた。彼らもここから、心と声を繋ぐ息の重要性にもっと目覚めて、聞く人の心に染み入るような歌声で、詩と楽曲のメッセージを届ける歌手に、益々成長していつてもらいたいと念じている。

(服部洋一 記)

出典：

- ① Valderrábano, Enríquez de. 1547. Libro de música de Vihuela intitulado Silva de sirenas. Valladolid: Francisco Fernández de Córdoba
- ② ガリレイ, V.2009. フロニモ：リュートの賢者（菊池賞訳、水戸茂雄監修）. 東京：東京コレgium.
- ③ 美山, 良夫. 1985. 街の歌城の響き：ルネサンス音楽のフォークロア（音楽選書 43）. 東京：音楽の友.
- ④ *Airs de cour avec la tabutration de Luth*. Edition MINKOFF.
- ⑤ Pisador, Diego. 1522. Libro de música de Vihuela. Salamanca: el autor.
- ⑥ Milán, Luis Luys. 1536. Libro de música de Vihuela de mano intitulado El maestro. Valencia: Francisco Díaz Romano.
- ⑦ Milán, Luis Luys. 1536. Libro de música de Vihuela de mano intitulado El maestro. Valencia: Francisco Díaz Romano.
- ⑧ 服部, 洋一. 1995. ルネサンスのマドリガル I, II, III. ルネサンスのマドリガル I, II, III（演奏解釈・楽譜校訂・歌詞対訳）. 東京：東芝 EMI. p.4-63.
- ⑨ Narváez, Luys de. 1538. Los seys libros del Delphín, de música de cifras para tañer vihuela. Valladolid: Diego Hernández de Córdoba.
- ⑩ 皆川, 達夫. キリシタン音楽入門：洋楽渡来考への手引き. 東京：日本キリスト教団出版局.
- ⑪ Narváez, Luys de. 1538. Los seys libros del Delphín, de música de cifras para tañer vihuela. Valladolid: Diego Hernández de Córdoba.
- ⑫ Dowland, John. n.d. The English Lute Songs (edited by Edmund H. Fellowes). London: Stainer & Bell Ltd.

使用楽器：

Vihuela de mano ビウエラ・デ・マーノ 紀井利臣 2016年製作

8course Renaissance Lute 8コース ルネサンスリュート 紀井利臣 2017年製作

* 本学講師、リュートなど

** 本学教授、音楽学、附属図書館長

*** 本学教授、声楽